

⑯ 日本国特許庁 (JP)

⑮ 特許出願公開

⑰ 公開特許公報 (A)

昭63-40782

⑯ Int. Cl.⁴
C 04 B 38/10

識別記号
L-8618-4G

⑯ 公開 昭和63年(1988)2月22日

審査請求 未請求 発明の数 1 (全3頁)

⑰ 発明の名称 リン酸カルシウム多孔体の製造方法

⑰ 特願 昭61-183590

⑰ 出願 昭61(1986)8月5日

⑰ 発明者 堀塚 康治 東京都渋谷区幡ヶ谷2丁目43番2号 オリンパス光学工業
株式会社内

⑰ 発明者 入江 洋之 東京都渋谷区幡ヶ谷2丁目43番2号 オリンパス光学工業
株式会社内

⑰ 出願人 オリンパス光学工業株式会社 東京都渋谷区幡ヶ谷2丁目43番2号

⑰ 代理人 弁理士 坪井 淳 外2名

明細書

1. 発明の名称

リン酸カルシウム多孔体の製造方法

2. 特許請求の範囲

(1). 結晶質のハイドロキシアバタイト微粉末又は β -トリカルシウムフォスフェート微粉末に解膠剤を加え、更に起泡剤を添加して連続した微細な空孔を有する多孔形成体を作製する工程と、この多孔形成体を乾燥処理してハイドロキシアバタイト又は β -トリカルシウムフォスフェートの骨格を形成する工程と、この骨格を有する多孔形成体を加熱して前記解膠剤及び起泡剤を分解消失させると共に、前記ハイドロキシアバタイト又は β -トリカルシウムフォスフェートを焼結せしめる工程とを具備したことを特徴とするリン酸カルシウム多孔体の製造方法。

(2). 解膠剤は、ポリアクリル酸及びその誘導体からなる水溶性高分子化合物であることを特徴とする特許請求の範囲第1項記載のリン酸カルシウム多孔体の製造方法。

(3). 起泡剤は、ポリオキシエチレンアルキルエーテル、ポリオキシエチレンアルキルアリルエーテル、ポリオキシエチレンアルキルアミン、ポリエチレングリコール脂肪酸エステル、アルカノールアミド、ポリエチレングリコール・ポリブロビレングリコール共重合体から選ばれる非イオン性界面活性剤であることを特徴とする特許請求の範囲第1項記載のリン酸カルシウムの製造方法。

(4). 起泡剤は、非イオン性界面活性剤に酸化エチレンを添加したものからなることを特徴とする特許請求の範囲第1項又は第3項記載のリン酸カルシウムの製造方法。

3. 発明の詳細な説明

【産業上の利用分野】

本発明は、微細生体、生化学物質の分離、精製吸着等に利用されるリン酸カルシウムの製造方法に関する。

【従来の技術】

従来、セラミック多孔体の製造方法としては以下に説明する2通りの方法が知られている。

①. まず、セラミック原料スラリにポリウレタンフォームなどの連続して空孔を有する有機質多孔体を浸漬して該多孔体の空孔内表面にセラミック原料スラリを含浸させる。次いで、加熱して有機質多孔体を分解すると共に、付着されたセラミックを焼結させてセラミック多孔体を製造する。

②. 湿式合成によって得られた非晶質リン酸カルシウムのスラリに起泡剤を添加する。つづいて、連続した微細な空孔を有する有機質多孔体を、前記スラリに添加した起泡剤を発泡させた後に浸漬するか、もしくは同スラリに浸漬した後起泡剤を発泡させるか、いずれかにより該スラリを有機質多孔体の空孔内表面に付着させる。次いで、スラリが付着された有機質多孔体を加熱して該多孔体を分解消失すると共に、非晶質リン酸カルシウムをハイドロキシアバタイトに熱変化させ、形成されたハイドロキシアバタイト骨格を焼結せしめて連続した微細な空孔が全体に亘って均一に分布されたリン酸カルシウム多孔体を製造する。

【発明が解決しようとする問題点】

て均一に分布し、かつ実用上に充分に高い強度を有するリン酸カルシウム多孔体の製造方法を提供しようとするものである。

【問題点を解決するための手段及び作用】

本発明は、結晶質のハイドロキシアバタイト微粉末又はβ-トリカルシウムフォスフェート微粉末に解膠剤を加え、更に起泡剤を添加して連続した微細な空孔を有する多孔形成体を作製する工程と、この多孔形成体を乾燥処理してハイドロキシアバタイト又はβ-トリカルシウムフォスフェートの骨格を形成する工程と、この骨格を有する多孔形成体を加熱して前記解膠剤及び起泡剤を分解消失すると共に、前記ハイドロキシアバタイト又はβ-トリカルシウムフォスフェートを焼結せしめる工程とを具備したことを特徴とするリン酸カルシウム多孔体の製造方法である。

上記解膠剤としては、例えばポリアクリル酸、又はポリアクリル酸アンモニウム塩などのポリアクリル酸誘導体等からなる水溶性高分子化合物が挙げられる。

しかしながら、上記①の方法では有機質多孔体の空孔内にセラミック原料スラリが充満して目詰まりが生じる。その結果、連続した空孔が全体に亘って均一に分布したセラミック多孔体を製造することが困難となる問題があった。特に、強度の点に着目してセラミック原料スラリを構成するセラミック粉末の粒度を小さくしてスラリの密度を大とし、強度を高めようすると、必然的に粘度が大となり、目詰まりを助長する結果となる。

また、上記②の方法では原料スラリに起泡剤を加え、有機質多孔体の空孔内に原料スラリを付着させるものであるが、起泡剤の種類により若干のばらつきがあり、表面張力の影響により表面に存在する空孔内の起泡と有機質多孔体の内部に存在する起泡では大きさが異なり、表面には比較的微細な孔、内部や下部の起泡は大きな孔になり易い。その結果、焼結後のおける機械的強度が前記ばらつきによって低下する問題がある。

本発明は、上記従来の問題点を解決するためになされたもので、微細な連続した空孔が全体に亘

上記起泡剤としては、例えばポリオキシエチレンアルキルニーテル、ポリオキシエチレンアルキルアリルエーテル、ポリオキシエチレンアルキルアミン、ポリエチレングリコール脂肪酸エステル、アルカノールアミド、ポリエチレングリコール・ポリプロピレングリコール共重合体などから選ばれる非イオン性界面活性剤又は該非イオン性界面活性剤に酸化エチレンを添加したもの等を挙げることができる。

上記多孔形成体の乾燥処理は、40℃前後で10～20時間処理する条件で行なうことが望ましい。

上記加熱処理は、例えば電気炉内で300℃/hrの昇温速度で焼成温度である1000～1300℃まで昇温し、該温度を0.5～1時間保持する条件で行なうことが望ましい。

本発明方法は、従来法の有機質多孔体を使用することによる目詰まり又は表面張力差により発生する孔形状のばらつきに伴う成形上の問題に対し、有機質多孔体と同じような作用をもたせるために、結晶質のハイドロキシアバタイト微粉末又はβ-

トリカルシウムフォスフェート微粉末に解膠剤を加え、かつ起泡剤を添加して起泡させ多孔形成体を作製し、更に乾燥処理して水分を少なくすると共に解膠剤で結合されたハイドロキシアバタイト又は β -トリカルシウムフォスフェートの骨格を形成し、ひきつづき該多孔形成体を高温で焼結することによって、既述した微細な連続した空孔が全体に亘って均一に分布し、かつ実用上に充分に高い強度を有するリン酸カルシウム多孔体を得ることができる。

【発明の実施例】

以下、本発明の実施例を詳細に説明する。

実施例 1

まず、粒径が $0.3 \mu\text{m}$ 以下の β -トリカルシウムフォスフェート微粉末 10g に解膠剤として 10% ポリアクリル酸アンモニウム塩を 10cc 加えて超音波混合した。つづいて、起泡剤としてボリオキシエチレンノニールフェノールに酸化エチレン 1000cc を加えた液 2g を添加した後、攪拌機を用いて均一に起泡するように攪拌した。攪拌後、前

で 1 昼夜乾燥した。乾燥後、アルミナ製容器(Al_2O_3 純度: 99.9%)に移し、 $300\text{~}^{\circ}\text{C}/\text{hr}$ の昇温速度で $1800\text{~}^{\circ}\text{C}$ まで昇温し、該 $1800\text{~}^{\circ}\text{C}$ で 1 時間保持して焼結を行なった。

本実施例 2 で得られた焼結品を切断して形状を観察した結果、全て開気孔で連続しており、その気孔径は $0.5 \mu\text{m}$ 付近であった。また、気孔率は 80% であり、実用的な強度を有し、使用に充分に耐えるものであった。更に、X線回折の結果、かかる多孔体は出発原料と同じハイドロキシアバタイトであった。

【発明の効果】

以上詳述した如く、本発明によれば添加する解膠剤の量及び起泡剤の種類により $0.05\sim 1.3 \text{~g}$ の微細な連続した空孔が全体に亘って均一に分布し、かつ空孔率が $45\sim 90\%$ で実用的な強度を有するリン酸カルシウム多孔体を製造でき、ひいては微細生体、生化学の分離、精製、吸着に使用される固定化酵素担体材又は骨充填剤や骨置換剤などに有效地に利用できる等頭著な効果を有する。

記多孔性流動体をパラフィン紙で内張りした所望形状の容器に流し込み、ひきつづき恒温恒温槽に入れ、 $40\text{~}^{\circ}\text{C}$ で 15 時間乾燥した。乾燥後、アルミナ製容器(Al_2O_3 純度: 99.9%)に移し、 $300\text{~}^{\circ}\text{C}/\text{hr}$ の昇温速度で $1000\text{~}^{\circ}\text{C}$ まで昇温し、該 $1000\text{~}^{\circ}\text{C}$ で 40 分間保持して焼結を行なった。

本実施例 1 で得られた焼結品は、全て開気孔のない開気孔品で、その気孔径は $0.8 \mu\text{m}$ 付近であった。また、X線回折の結果、かかる多孔体は出発原料と同じ β -トリカルシウムフォスフェートであった。

実施例 2

まず、粒径が $0.3 \mu\text{m}$ 以下のハイドロキシアバタイト微粉末 10g に解膠剤として 20% ポリアクリル酸アンモニウム塩を 10cc 加えて超音波混合した。つづいて、起泡剤としてデカグリセリンモノラウレート 1.8~g を添加した後、攪拌機を用いて均一に起泡するように攪拌した。攪拌後、前記多孔性流動体をパラフィン紙で内張りした所望形状の容器に流し込み、ひきつづき恒温恒温槽に入れ、 $40\text{~}^{\circ}\text{C}$ で 15 時間乾燥した。乾燥後、アルミナ製容器(Al_2O_3 純度: 99.9%)に移し、 $300\text{~}^{\circ}\text{C}/\text{hr}$ の昇温速度で $1800\text{~}^{\circ}\text{C}$ まで昇温し、該 $1800\text{~}^{\circ}\text{C}$ で 1 時間保持して焼結を行なった。